

修士論文 (要旨)

2014 年 1 月

目標言語使用環境における第二言語不安
—日本語学校の中国人学習者を対象として—

指導 堀口純子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

211J3905

周 茜

目次

第1章	はじめに	1
第2章	先行研究	2
2.1	用語の定義	2
2.2	第二言語不安に関する研究	2
第3章	調査概要	5
3.1	調査方法	5
3.2	調査対象者	5
3.3	分析方法と枠組み	6
第4章	調査結果と分析	7
4.1	CM1の場合	7
4.2	CM2の場合	20
4.3	CF1の場合	36
4.4	CF2の場合	42
第5章	全体の結果および考察	53
5.1	教室内不安の内容とその要因	53
5.1.1	日本語能力の不足による不安	54
5.1.2	教師による不安	54
5.1.3	発話に対する不安	55
5.1.4	重要な他者による不安	56
5.1.5	教科書に対する不安	57
5.1.6	試験に対する不安	57
5.2	教室外不安の内容とその要因	58
5.2.1	聴解不安	59
5.2.2	日本人とのコミュニケーションにおける不安	60
5.2.3	人的ネットワーク構築の不備による不安	61
5.2.4	敬語使用不安	63
5.2.5	アルバイトに関する不安	63
5.2.6	教師への依存からの不安	63
5.2.7	重要な他者による不安	64
5.3	どちらにも分類できない不安の内容とその要因	65
第6章	総合的考察	66
第7章	まとめと今後の課題	70

謝辞

参考文献

巻末資料

要旨

キーワード：第二言語不安、教室内、教室外、学習環境

日本語学校は多くの留学生にとって、日本への留学のルートとして重要な選択肢になっている。日本語学校に在学している学習者が短い時間でのコミュニケーション能力の獲得を狙っているが、場面によって不安を覚える話をよく耳にする。日本語習得に影響するため、学習者の不安を軽減することは日本語学習成功の鍵と言えるだろう。本研究は日本語学校の中国人留学生を対象として、彼らが教室内と教室外で感じた第二言語不安の実態とその不安にかかわる要因を見出し、第二言語不安の本質について検討し、不安を対処できる方策を提案することを目的としている。

元田(2005)は第二言語不安を「第二言語の学習や使用、習得に特定的に関わる不安や心配と、それによって引き起こされる緊張や焦り」と定義しており、学習者の目標言語における不安を測る日本語不安尺度 (Japanese Language Anxiety Scale: JLAS) を作成し、その後の研究でその信頼性、妥当性が検討されている。また、不安が外国語教育・学習場面に与える影響を検討する枠組みとして、Krashen (1981) の情意フィルター仮説や Tobias (1986) プロセスモデルが挙げられる。また、第二言語不安は言語習得を阻害するだけでなく、学習を促進する場合もある (Brown (1980)) とも指摘されている。

本研究では、日本語学校の中上級クラスに在学している中国人留学生 4 名 (男性 2 名、女性 2 名、全員 20 代) を対象に半構造化インタビューを行った。インタビューから得られたデータを文字化し、Tobias のプロセスモデルの理論的枠組みに従い、既存の日本語不安尺度における不安項目を参考にし、彼らが感じた第二言語不安を「教室内不安」「教室外不安」「どちらにも分類できない不安」に分け、個別分析を行った。その後、各対象者のデータ分析の結果に基づき、類似した不安の項目を統合し再分類を行い、各不安およびその要因について分析し考察を行った。

結果としては、まず、教室内不安では、「日本語能力の不足による不安」「教師による不安」という 2 項目が調査協力者全員に共通しており、次に「発話に対する不安」「重要な他者による不安」「教科書に対する不安」「試験に対する不安」があることがわかった。「日本語能力の不足による不安」は日本語能力への否定的な評価と不適切な目標設定によって生じたものである。「教師による不安」は教師に対する意識、学習者ビリーフと教師ビリーフのズレ、教師の授業の進め方、教師とのインターアクションなどと関わっている。また、「発話に対する不安」の要因としては、場面、話題、間違いに対する心配、特定の教室活動が挙げられる。「重要な他者による不安」は他の学習者の存在を脅威と捉え、他の学習者に過度な意識を払って、ライバル心を持つことによって感じられる。「教科書に対する不安」は、教科書に対する不信感や、学習者が教科書学習への信頼と実用性重視との二つの価値観の間で揺れ動くことから生じる。「試験に対する不安」は母国と異なる出題形式に慣れていないために生じるのである。

また、教室外不安では、「聴解不安」「日本人とのコミュニケーションにおける不安」「人的ネットワークの不備に対する不安」という 3 項目が全員に確認され、「敬語使用不安」「アルバイトに関する不安」「重要な他者による不安」という不安項目も見られた。これらについては、学習者が最も不安を感じるのは「聴解不安」であり、その原因は環境

の特質、学習者の日本語レベル、母国語の中国語で考えること、学習者の外国人としての位置づけに帰属させることができる。「日本人とのコミュニケーションにおける不安」は日本語能力の不足、コミュニケーション能力の不足、不適切な目標設定、日本人に対するステレオタイプ、間違いに対する心配、相手の特質や評価と深く関わっている。「人的ネットワークの不備に対する不安」は学習者が置かれた環境の局限性と人間関係への欲求との葛藤から生じており、日本人と信頼関係の構築困難や日本語によるコミュニケーション困難から影響を受けている。さらに、学習者は教師をネットワークの一部と捉えているため、教師との関わり方に対する不満も不安に繋がる。「敬語使用不安」の要因としては、敬語学習の意識、文化的要因、日本語能力の不足、教科書の敬語に対する不信感が挙げられる。「アルバイトに関する不安」はアルバイト先における言語使用の不足に対する不満、人間関係への配慮、差別によって引き起こされやすい。「重要な他者による不安」は、友人、語学力が自分より上の留学生、同国人の留学生を「重要な他者」と位置づけたことから感じたのである。

そして、「どちらにも分類できない不安」は、「家族に配慮することからの不安」「日本語力の伸び悩みによる不安」「自信喪失による不安」「学習継続意欲のなさによる不安」から構成されている。これらは留学によって発生した学習・アルバイト・日本での生活の疲れやストレス・親からの期待などといった要因が複雑に絡み合っていて生じており、それに間違いに対する恐怖心、日本語習得の限界や自分の日本語能力の不足を認知できないことや社会参加の不足が加わり、教室内外に関わらず、学習の全過程で見られる。

稿者が調べた不安項目の中、教室内外不安の「教科書に対する不安」や「試験に対する不安」という2項目、教室外不安の「敬語使用不安」「人的ネットワークの不備に対する不安」、「アルバイトに関する不安」「重要な他者による不安」の4項目は既存のJLASの項目に見当たらない。そこから、JLASの質問項目の構成について再検討する必要があるのではないかと考えられる。

以上のように、目標言語使用環境における第二言語不安の様相とそれぞれに関わっている要因を解明した。環境の視点から総合的に考えれば、まず、留学による言語環境や学習環境の変化が学習者にもたらす影響が大きく、学習者が目標言語使用環境における学習の効果を過大視し、困難に対する認識が不十分であったことが不安に繋がっていた。また、学習者が置かれる学習環境の特質が不安と直接関わっていることもわかった。本研究の結論のひとつとしては、不安があることが必ず学習を阻害するのではなく、条件により動機付けに変わり得るし、学習へのエネルギーに変容できると考える。不安に対処するためには、学習者に自信をつけさせることや、リソースやネットワークなどがより豊富な学習環境を作り上げることが重要だと思われる。これは教師の課題だけでなく、学習者自身の不安をコントロール能力の育成や日本語学校の制度設計についての支援が不可欠である。

不安をどう捉えるべきかについて、稿者は、不安の経験とその軽減は学習者にとっては「新たな自分」を探す一つの過程であり、それを乗り越えることが学習者にとって大きな成長の機会となり得ると考え、また、不安に対する認識や対処のプロセスが、教師側にとっても「新たな自分」や「新たな日本語教育」に繋がると考える。

主要参考文献

- 小河原義朗（1999）「外国人日本語学習者の発音不安」『東北大学文学部言語科学論集』 3,13-24
- 加賀美常美代（1994）「異文化接触における不安の決定因－中国人就学生の場合」『異文化間教育』 8,117－126
- 岡部悦子(2002) 「口頭発表場面におけるスピーチ不安について」『講座日本語教育』 38,125－148
- 倉八順子（2005）「第二言語習得に関わる不安と動機づけ」『講座・日本語教育学言語学習の心理』 3, 77-94
- 塩谷奈緒子（2008）『教室文化と日本語教育：学習者と作る対話の教室と教師の役割』明石書店
- 志田あゆみ（2006）「立命館大学短期留学プログラムで学ぶ日本語学習者の第二言語教室不安－縦断的調査による実態把握の試み－」『立命館高等教育研究』 7, 89-104.
- 西部由佳（2009）「教室内外での出来事による学習者の『学習意欲』の変動とその背景となる心理的要因－『可能性の予期』に注目して－」『小出記念日本語教育研究会』 17,21-34
- ネウストプニー,J.V.（1982）『外国人とのコミュニケーション』岩波書店
- 八島智子（2004a）『外国語学習の情意と動機』関西大学出版会
- 浜田麻里・林さと子・福永由佳・文野峯子・宮崎妙子（2006）「学習環境－日本語学習者と学習環境の相互作用をめぐって」『日本語教育の新たな文脈』国立国語研究所，66-100
- 松下達彦（1999）「留学生のためのソーシャル・サポートと日本語教育」『留学交流』 11(12), 16-19
- 元田静（2005）『第二言語不安の理論と実態』，溪水社
- Aida, Y.（1994）Examination of Horwitz, Horwitz and Cope's construct of foreign language anxiety: The case of students of Japanese. *Modern Language Journal*, 78, 2, 155-168.
- Ely, C.（1986）Language learning motivation: A descriptive and causal analyses. *Modern Language Journal*, 70, 28-35.
- Horwitz, E. K., Horwitz, M. B. & Cope, J.（1986）. Foreign language classroom anxiety. *Modern Language Journal*, 70, 125-132.
- Krashen, S.D. (1985) *The input hypothesis: Issues and implications*, Longman
- MacIntyre, P. D., & Garden, R.C. (1994b) The subtle effects of language anxiety on cognitive processing in the second language. *Language Learning*, 44, 283-305
- MacIntyre, P. D., (1995). How does anxiety affect second language affect second language learning?: A reply to Sparks and Ganschow. *Modern Language Journal*, 79, .90-99.
- Tobias(1986) The effect of affect on foreign language learning :A review of the anxiety research. *Language Learning*, 28, 129-142
- Young, D.J(1991) Creating a low-anxiety classroom environment : What Does language of habit-formation, *Journal of Comparative Neurology and Psychology*, 8, 59-482